

ヨーゼフ・ボイス・ゼミナール

第3日「社会彫刻」

こんばんは。皆さま、今日は3日にわたる私の講演会の最終日になるわけですが、今日もおいでいただきましてありがとうございます。また、講演を通して、素晴らしい通訳をしてくださったことに心から感謝いたします。

まず、思い出していただくために、ベースになっておりましたイメージをここに描かせていただきます。

まず、この2日間、昨日までの2日間で何をやってきたかというのを少し思い出していただきたいと思います。今、赤で描かれたところですが、それが1日目のテーマでした。×を書かれたところですね、あれが出発点となっております。そして、あのポイントでヨーゼフ・ボイスは彫刻概念を見つけたというか、そこで彫刻概念からボイスは出発したわけです。そしてその後、彫刻概念が3つに分けられました。カオス、動き、そして、それが形態になるという、そういう3つに分解されたわけです。

そして、そこで問題となったのは、創造力というものです。つまり、彫刻概念、それは人間が進化していくその軸の中で生まれてきたものでもあったわけです。つまり、人間はそれ自体が彫刻であるということです。また、人間は彫刻であると同時にその彫刻を創造する人間でもある。創造する立場でもあるというふうに申し上げます。ここで最終的に「彫刻＝創造力」であるという式が成り立ちます。

ここに書きました「彫刻＝人間」という式ですが、そして、その左側に書いたグリーンのところですね、これは自然、ただし、これは広義の意味で進化の原理を表しております。

そして、ここ、彫刻と創造力が合致するこのところに、自由、自由の本質的な原理が姿を現してきました。すなわち、進化から自由へ、能力は新しい原因に据えられます。彫刻と創造力の一致を通して新しい原因が、すなわち、ここに原初の原因があり、進化がそれをこの地点までもたらした時に、ここで人間を通して、自由の原理を通して、能力は新しい原因として進化の中に置かれるのです。

最初の部分は、アクションの概念につながっていきます。すなわち、ボイスは、彫刻の概念をいわば人間に適用していったわけですが、その帰結からアクションが生まれてきました。つまり、アクションは自由を通して新しい原因となっていきます。

ここまでが第1日でした。

昨日の夜、第2部では、こうしたアクションから平行過程の原理というものを明らかにしました。

教師と生徒の関係ですね。

教師と生徒の間に自由な像を形成していく、すなわち、自由というものは、獲得されなければいけないもの、学びとらなければいけないものだからです。この教師と生徒の関係というものは、社会彫刻の原型だと言うこともできるでしょう。

芸術として教師であること、芸術として生徒であること。

この自由の原理に新しい原理が加わってきます。すなわち、平等の原理です。同権という意味での平等、権利の上での平等ということです。この平等の原理というものは、民主主義の根本の原理なのですが、人それぞれが法の前で平等である。そのことを通してまさに自由から獲得されたさまざまな能力や才能といったものが発展していくのです。

ですから、平等というのは今日多くの人々が考えているような自由を制限するものではなくて、その反対のものです。それは自由の拡大したものです。というのは、それは自由の原理から成長したより高次の原理で、それによってはじめて、再び自由が可能になってくるのです。

そこから、一つの理念が現れてきます。3分節化の理念です。これはメルセデスのエンブレムではなくて、ルドルフ・シュタイナーが発見した社会機構の3分節化の理念です。すなわち、自由、平等、友愛ですが、これらは社会機構全体と関連があります。自由の原理は、精神生活と関連し、平等の原理は法生活と、友愛の原理は経済生活と関連します。

さて、自由は人間の「私」と関連するわけですが、平等の原理のもとでは新しい大きなものが出てきます。つまり、すべての人間です。社会、あるいは社会的なものと言うこともできます。社会的存在としての人間です。

重要なことは、今示したこの領域に、ここから自由の原理の進化が発展していったことです。

そして、ヨーゼフ・ボイスは、アクションを発展させていったある特定の点で、今、私は境目を書きましたが、社会的な仕事の領域に入っていきます。要するに、いわゆる政治的な芸術、政治的といわれる段階に発展していったわけです。

ここでの違いは、それはもはや政治といわれるものではなくて芸術、社会の造形だということ。違いはまさにここにありますが。すべてはここから展開していく、この方向へ、この点から、自由存在としての私が出発点となります。そして、そこから続いていくものは、政治といわれるべきものではなくて、芸術です。

私はそのことについて書いたことがあります。ヨーゼフ・ボイスは1972年、人間であると同時に彫刻として、自由存在としての人間の平等という理念とともに『ドクメンタ5』に登場しました。国民投票による直接民主主義という意味で、法の前での平等を実現することです。彼は、このドクメンタで100日間にわたって人々とこの課題に関連して話し、彫刻概念と関連したこの芸術的課題を叙述していきました。

この100日間の間毎日、ボイスの机の上にはメスシリンダーに差した1本のバラがありました。そして大事な言葉がそこで出てくるわけなんですけれども、「バラなしでは私たち何もやりません。そこではもはや何も考えることができないから」と言ったわけです。

そして、いわばやや神秘的に聞こえるかもしれませんが、自然という概念が何度もここで語られたわけです。

自然、バラ、思考、人間の自然。それがそのままつながっていく存在であると。そういうふうに主張したかったわけです。

そして昨日の最後に、ヨーゼフ・ボイスは、結局この100日間のドクメンタ滞在の後、デュッセルドルフのアカデミーに戻ってまいりまして、このアカデミーから解雇されたということをお知らせしました。これに関係しておりますのは、入学試験のやり方というもの、これを根本的に変えようとした、さらに、いわば政治的な目標設定でありますアカデミーの自主管理ということ、これを貫徹しようとしたために、ヨーゼフ・ボイスは解雇されるわけがあります。そこまでが昨夜の2番目のセッションでした。

これから3番目に入ります。ここからが始まりになるわけです。最初のスライドを見せてください。

今日問題にしますのは、円で描いた部分です。ご覧のように、この丸い部分は地球を意味しています。そして地球を意味していますけれども、その地球はリンゴとして描かれています。リンゴ、これは言うなればバラの産物です。バラが実を結んでリンゴになると考えてください。

これは、ヨーゼフ・ボイスが作りました絵はがきなんですけれども、この上に「経済における熱時間機械」と書かれています。

アフリカ、ヨーロッパ……、ちょうど裏側になるのは日本です。

この中に、熱という言葉、それから時間の機械という、いわばタイムマシーンですね、そして経済、この3つの概念が表れております。これにつきましては、本日までのところまだお話をしてまいりませんでした。

この経済というものは、非常に大きな3つ目の極として捉えることができます。初めの極が自我、私ということです。2番目が、社会ということです。この経済という3つ目の極は非常に包括的なものでありまして、もちろん自我、社会を含むだけではなくて、地球そのものも包括しております。その中には、植物も含まれれば、動物も含まれれば、人間も含まれます。人間の活動としての経済、その中には、人間が人間に対して、あるいは人間と一緒に働く、そういう作用も含まれております。

ですから簡単に、この下に全世界と書いておきます。

この円が、最初に意味していることは、ただいま申し上げたようなことです。

今日では、私たちよく分かっていることですがけれども、リンゴというものは食べることができるんですね。そして食べてしまいますと、残っているのはこれだけです。芯の部分ですね。

こうやってみますと、一体どういうことになってしまったのだろう。この失われた部分というのは何だったんだろうという問いが湧き起こってくるわけです。

私たちは、この自由の中の存在としての自我というものから、芸術という動きを通して、最終的に経済の問題に帰着いたしました。このエコノミー、経済という問題は同時に、いま暗示した意味でエコロジーでもあるわけです。

奇妙なことに私たち、この現代を生きている人間は十分に知らないわけですが、このエコロジーというもの、これは結局は、自由に関する学問、自由とは何かという学問の帰結するところだということです。

なぜ、これが奇妙に聞こえるかと言いますと、このエコロジーというのはどこかで自由を損なうものではないかと、そういう感覚を私たちは持っております。つまり、あまりにも自由な経済活動の結果、環境が破壊されていくという考え方ですね。ですから、強力な国家の力によって、このあまりにも自由な放埒なものを、制限しなければいけないと私たちは考えてしまいます。しかしながら、必ずしもそうではないのです。

このような私たちの考え方をきちんと捉えようといえますと、そのときの発する問題というのは、この一体私たちが言う自由というのはどういう自由概念なのかということです。これは非常に大事な問題です。今日では、いわゆる共産主義、社会主義というものが崩壊したように見えます。その崩壊の後、崩壊というのは何であったかと言いますと、言うところの自由が、このようなシステムに勝ったということです。しかしながらそれが終わってしまいますと、自由というもの、新しい自由というものは何なのか、もう一度問い直されなければならなくなっているわけです。

結局、私たちの持っております自由というイメージというものはですね、自我というものから出発いたしまして、世界に関わっていきます。結局何をやるかと言いますと、この自由というのは、世界を搾取すること、かじり取ることにほかなりません。その結果、先ほどのリンゴの芯のような、ああいう、丸いサークルではなくてやせ細ったものになるわけです。

これを、その自我を、エゴイズムと呼ぶことができます。

そして、世界を壊していくこの作用のことを、資本主義と呼ぶことができます。

結局、今日私たちが抱えておりますエコロジカルな危機というものは何かと申しますと、このような形で、エゴイズムから出発しました全世界に対する関わり方が世界に対して脅威になっている、結局この脅威が個人のところに何らかの形で舞い戻ってくるわけです。一体これは何なんだろう。このときに自然という概念がもう一度問題になってくるわけです。

問われなければいけないのは、この自由という原理が一体どういう関わり合いをこのような世界と持っているのだろうか、そのことをきちんとしなければいけません。

まさにこの自由の原理というものが、エコロジカルな危機というものをもたらしております。これは人間の自由です。これは決して象ですとか、先ほどビデオをお見せしましたコヨーテではありません。まさに自由である人間がこのようなエコロジカルな危機というものをもたらしております。

ですから、下のような自由の考えに立つ限り、このような自由というものは制限されなければいけない。つまりエコロジカルな危機をもたらすようなそういう自由というものは当然ながら制限されてしかるべきものだということになります。しかし、私たちは、ボイスが言っている自由というものは、つまり彫刻という考え方によって改めて自由は定義されなければいけない。そして、この自由が獲得されれば、こういう問題は起こらないんだということなのです。

もちろん、ここでも自由の原理というものは生じてはおります。

その意味で申しますと、下の図におきますこの自由というものはどういうふうに捉えられるかと言いますと、厳密に言いますと、人間の本性の自由、ここに関わってくるものであります。

結局、自然というこの自由、自然な自由というものは、まだ盲目的な状態のまま作用を及ぼしております。つまり、人間の本性、これも自然というものですが、人間の中にある自然、こういったものはまだ盲目状態から解放されていないんです。

この原理、自由の原理ですけれども、これがどういうふうになるかと申しますと、下の方に描きましたような、そういう自然の中における自由というものが、一度解放されなければいけません。そして、より高い進歩の段階である、より高い自由へと高められる必要があります。ではそれを一体誰が行うのか。これを行うのは、やはり人間そのものなのです。

私たちは現在 20 世紀の末に生きております。およそこの 20 世紀というものを考えた場合、これは経済文化の中にあつたということが言えます。すなわち、すべてに覆いかぶさる形で経済というものがあつていました。経済はすべてに優先しております。経済条件がすべてであり、経済的観点がすべてを覆いつくしてしまいます。その意味では、私たちは確かにこの、先ほどのサークルの中に生きておりますけれども、そのサークルの中に生きている私たちは言うなれば、人間の自由の本性というものが、まだ未解放の、解放されていない状況で生きている。そういう状況なんだと捉えることができます。

ですから、ここで私たちが発しなければいけない問いというのは、本当の人間の本性に基づくものいかにして到達できるかということです。ただこれによってのみ、私たちは、本来の意味での経済、エコロジー、経済＝エコロジーですけれども、そういったものに到達できる。それはどうやってかと言いますと、プラスチック、彫刻というものが地上で実現されることが必要です。すなわち、上の図で言われたような、そういう彫刻というものが実現されることによって、人間の本性である自由というものが自然と再び融和することができます。仲直りすることができます。現在私たちが持っております人間の盲目的な自由というものは、自然を壊すものです。しかし、自然と仲直りするようなものは、現在のところ含まれておりません。

これが、まさにボイスが言うところの社会彫刻という理念なのであります。

より正確に申し上げますと、この全体の発展の図柄、これ全体が社会彫刻なんです。

すなわち、この道のりそのものが目標なのです。目的なのです。

そして、最後の円、サークルの部分、これはすでに一番初めの端緒の部分に理念として含まれております。

そして、この逆の言い方をしますと、この道のりそのものが、最終的にこのサークルの部分として実現するような実質に到達するものであり、人間の発展の段階、結局実質を持って社会彫刻という形で、フォームを取っていくような、そういう道のりであると考えられることもできます。

これが、「暖かみ」あるいは「熱」の図式です。

そして、下の図の方は、言うなれば「熱」の逆、「冷たさ」、「暖かさ」の反対の「冷たさ」の図柄です。これはますます縮小するように、縮こまっていくよりしようがないものです。

72年の『ドクメンタ5』で、そこで先ほど話しました「バラなしでは何もできない、バラがなくては考えられない」と言ったわけですが、そこで100日間にわたりまして、ヨーゼフ・ボイスはそのドクメンタを訪れた人たちと直接対話を試みました。そこでは直接民主主義というものが、結局、人間が、私たちが実現していく、直接民主主義というものが、まさに芸術家の道であると、対話を通じてそのことを訴えていたわけです。

つまり、これによりましてボイスは最初の境界線というものを突き破って、社会へと向かっていったわけですね。これが直接民主主義の運動でした。

この 100 日間にわたってボイスが行ったことはなんだったかと言いますと、これはいうならば思考、考えることの彫刻であり、あるいは対話の彫刻であった、あるいは見えない彫刻であったとすることができます。すなわち、まだ目にすることのできない未来というものを模索する、そういう彫刻であったとすることができます。

民主主義というのは何かと言いますと、一人一人が同じ権利を持つという、同じだけの票の重さを持つということです。同じだけの発言権、同じだけの重みの意見を持っているということです。

自由の原理としての、私、自我というものがそこにあります。

この境界線のあとの一つ一つの点が、その自由原理としての私です。さまざまな自我があります。

結局、このような自由原理としての自我というものが集まりまして、下から上へ向けまして、どうしてもお互いの権利の調整ということが必要になります。結局、権利を調整するということは、みんなが一緒になってお互いの権利をどうやって実現していくか、あるいはお互いの権利がぶつかり合わないようにするにはどうすればいいかということで、協力していくということです。

そうやっていわば権利の調整という形で出てくるものが、法というものであります。この法というものが第一に何に関わるかということ、それは自由に関わります。自由というのは何かと言いますと、ここで言うておりますのは、例えば、社会的なインスティテューションとしての学校であるとか、アカデミーというもの、こういったものをいかにして自主管理するかということになります。結局これは精神的な制度としての学校、アカデミーというものが成り立っていくためには、どうしても必要なものです。

そして、これは第 2 に権利の調整ということですね、自由に関わるだけではなくて、右側の方向に、すなわち経済にも関わってまいります。結局、経済のいわば法、調節、経済における権利の調整というもの、こういったものが法として必要となってくるわけです。それをみんなが作っていくことになるのです。

結局この経済に関わります法則というものですけれども、この法則に関わりましては、どんな経済法則が必要か、それを私たちは十分に今のうちにですね、実現されていないこういったものを私たちが、きっちりと頭の中で捉えることが可能かどうか、すなわち、私たちにはそれだけの能力があって、パースペクティブを開いていくことができるかどうかというのが問題です。すなわち、未来の経済、未来の貨幣というものは、もちろんここではまだ目に見ることはできないし、まだ存在していないわけです。しかしながらこれを私たちの頭の中で捉え、考えていくことが必要になります。結局、人間が住む先ほどの世界です。この世界というものがきちんと実現されるためには、この経済の法則に関わります、信用であるとか、貨幣であるとか、収入であるとか、こういったものが私たちの頭の中で生き生きと捉えられなければいけません。そうしなければ、このような図式というものは、単なる図柄として抽象的なものに留まってしまいます。実質を持つことはできません。私たちは、これをきちんと考え抜くことによって、何とかこれに実質を与えていく必要があるのです。

一番初めの右側の線までですね、あそこの線までのところ、1972年のドクメンタ、『ドクメンタ5』において、このドクメンタに来た人たちと100日間にわたって討論したわけです。その次の76年のドクメンタにおいては、そのようなテーマがすでに過去のものとなり、次に出てまいりましたのは、今出てきたような経済の問題、エコノミーの問題です。この経済の問題をめぐってこの76年のドクメンタでも、ボイスは100日間にわたって世界中から訪れた人たちとパーマネントなゼミナールを、討論、話し合いをずっと持ち続けたわけです。

この76年のドクメンタの時には、しかしながら、このようにエコノミーについての話し合いをただけではなくて、ボイス自身の彫刻も行っております。これは『作業場における蜂蜜ポンプ』というものでありますけれども、その作品、彫刻をここで展示しております。そして、この『蜂蜜ポンプ』というものは、100日間の間ずうっと作動しておりました。

次のスライドをお願いします。

これは、昨日もお目にかけましたスライドで、「民主主義は愉し」と書かれています。『ドクメンタ5』の終わりに、ヨーゼフ・ボイスは、芸術アカデミーの事務局を占拠しまして、そこから警察によって外に出される時のものです。

その5年後、『作業場における蜂蜜ポンプ』でカッセルに。

次のスライドを。

1日目に『女王蜂』から始めたところを思い出してみてください。ここに再び、堅い木の上に載っている女王蜂があります。そして、その板の上に、女王蜂はハートの形をして載っていると言うことができるのではないかと思います。それは、まだ手を加えられていない木の上にある熱の原理です。そして、この手を加えられていない木にいよいよ取り組んでいく必要があります。また、蜜蜂は蜂蜜を生み出すものです。

そして、この作品が誕生してから 20 年以上経って、今度は蜂蜜が加わってきます。

そして、蜂蜜がどのような役割をするかということと……。次のスライドをお願いします。

蜂蜜ポンプがどういうふうになっているかというのをちょっとご説明いたしますと、これはドクメンタという催し物、皆さんご存じだと思いますが、その中心にあります建物はフリーデリチアムというものなんですけれども、そこにこのように塔のような空間がありまして、その中に設けられております。そして、各階には階段がありまして、また各階にのぞき窓のような小窓があります。

この明かり取りのためのような、この細長い塔のような形なんですけれども、この中ですね、金属パイプが作られたわけですね。金属パイプの先がこのようにU字形になっています。そしてこの先端にホースが取り付けられています。そして、この一番下の部分にはすね、鉢が置いてありまして、そこに蜂蜜が入っています。ポンプによってこれは吸い上げられて、そして一回下りてきたものが、隣の部屋に行って、また蜂蜜だまりの所に戻ってくるわけです。

ポンプによってこのように持ち上げられます。

U字形になっている部分、この中も蜂蜜でいっぱいになっております。

U字の先端で、もちろんストップしてしまいます。

そして、このホースを通して蜂蜜は下へ下りていくわけです。そして一回隣の部屋に行ってもた戻ってくる、そういう還流するシステムです。

次のスライドを。

これは、上から下を見たものです。

ここから先ほどのパイプが上に行きます。これはホースが戻ってきます。

ここにモーターがありまして、こちらの方へ蜂蜜が汲み上げられていくわけです。

もう1つ別なモーターがここにありますが、これは蜂蜜ポンプと直接関係ありません。これはくるくると回る銅の頭を持っておりますけれども、そしてここにはバターがその周りについて、例によって脂肪ですね、これをぐるぐるぐるぐるすると年がら年中掻き混ぜているわけです。

次のスライドを。

そして今の所ですね、隅の所に3つの壺があるわけですね。蜂蜜の入っている壺です。上の方に、たまたま蜘蛛の巣があります。それは、ボイスの作品ではなくて、たまたまそこにあつたんですけれども、これは素晴らしいということで、この3つの壺をその下に備え付けたわけです。

次をお願いいたします。

この場所は、穴が開いていて、次の部屋へとホースが一回出ていきます。その隣の部屋というのはですね、「自由国際大学」の部屋です。

次をお願いします。

ご覧のように先ほどの小さな穴から出てまいりましたホースは、この隣の部屋、自由国際大学の部屋に入ってきて、ぐるっと回りまして、また先ほどの部屋に戻ってくるというふうになっています。そして、100日間にわたって対話集会が行われたわけです。そして、ここにいるのはヨーゼフ・ボイスですね。

この蜂蜜ポンプというのは、循環回路でありまして、この作業場、この100日間対話がなされている作業場では、その上の方に、言うなれば精神的な蜂蜜がいつも動いております。そして、下の人間はお互いに話をしているわけです。そういう意味で『作業場における蜂蜜ポンプ』という名前が付いているわけです。

ボイスが言うには、大きな企業ではどこでもこのような装置が付けられるべきであると、そういうふうに言ったわけです。

ちょっと明かりをつけてください。

ここで、この期間ずっと話されていた、この対話集会において100日間にわたって話されておりましたその根本的なアイデアというもの、考え方というものはどういうものであったのかということをお話しようと思います。

さて、その話し合いが行われたきっかけというのは、シュムントから出ております。シュムントという人物は長いことシュタイナーの理念を研究しておりました。シュタイナーの社会機構の3分節化ですね、そしてその理念を経済の方に投影していこうとしたわけです。

今日皆さんにお話できるのは、本当に大まかなところだけです。と申しますのも、もし細かいところに入っていこうとすると、何日も何日もゼミナールをやらなければならないくらい大変なことだからです。

ですから、今日話すのは、この円のところです。

そして、今この円は経済全体を意味していると思ってください。

そして、まず最初に自分たちではっきりと区別しておかないといけないことは、2つの分野があるということです。1つ目は生産、2つ目は消費、という2つです。この2つをきっちり分けて頭の中で考えておかなければなりません。

この2つをはっきりと分けておくことが重要になります。といいますのは、この2つの分野を分けるということは、かつて昔の経済ではなかったことだからです。例えばですね、非常に小さな村の中では、生産する者と消費する者、これは同一人物だったわけですね。そして、生産をしつつ、その中の人たちが消費していく、ですから、この2つを分けることは必要ななかったわけです。ただし、現代の経済におきましては、分業ということが非常にめざましく発達してきています。ですからこの2つの分野を分けることが非常に大切になってきているのです。

また、この生産の分野に何が入るかということですが、いろいろ分業の中に入っております。いくつかのことが入ります。例えば公共のサービスなんかはこの生産の分野に入ります。

まずこの流れを有機的なシステムの中で見ることが非常に重要になってまいります。と申しますのは、まず下の方の生産の過程で生み出された生産物ですね。これは矢印が上の方へ上っていておりますけれども、あそこの消費の分野で消費されるわけです。そして、労働力というものが消費の分野から生産の方へ流れていきます。そして左側の丸で囲んだところ、あれが能力を集めて使っていく企業になるわけです。そして右側の方に描いた丸、あちらは市場ということになります。

生産分野と消費分野の非常に大きな違いなんですけれども、これをしっかりと把握していただきたいのですが、まず消費の分野におきましては、個人というものが非常に大きな役割を果たしてまいります。要するに個人で決定するということになります。1人の人間がいいと思えば、それを消費することができるわけですね。ところが下の方の生産の分野におきましては、分業というものが非常に大きな役割を果たしていきます。つまり、生産の分野で生み出される生産物というのは、どんな小さなものであっても全世界のいろいろな人たちが協働してそれを作り上げているわけです。全員が協働して1つのものを作り上げる分業の原理というものがそこには働いているわけですが、それが今度は上の消費される分野になりますと、個人の決定によりなされるということになります。これは非常に大きな違いですので、しっかりと頭に残しておいてください。

こちらの生産の分野ですが、先ほど申し上げましたように、いろいろな人または企業が協力して1つのものを作っていくわけです。そしてその作り上げるためには、能力、また創造力が共同して使われ、そして1つの製品になっていくわけです。その1つの製品が最後にできるというのが生産の分野になっております。

そして、ここで申し上げています生産物ですけれども、どんな生産物もその中に入ります。形のあるものだけでなく、精神生活に関わってくるもの、その中には例えば学校も入ってくるわけです。その学校で行われること、それも生産物と見なされるわけですが、この生産分野で行われることは、精神生活の分野における生産物においても、すべてが分業というプロセスによって生産されております。

そして、この生産分野で生産された製品というものは、消費の分野で消費されるわけですが、個人によって買われ、個人によって消費されるのです。

要するに、この循環のシステムというのは、普通の有機体と同じように作り上げ、そして消費されるということがなされています。

そして、経済にはただ2つの価値しかないということ、これを頭にとめておいていただきたいと思います。まず1番目の価値というのは、左側の企業のところに流れ込んでいく創造力、人の能力ですね、これが1番目の経済価値、経済価値1です。

そして、こちらの方は完成された生産物ということになります。経済価値2ですね。

これが2つの経済価値ということになります。

そして、ここでボイスのテーゼが出てまいります。つまり、「資本は人間の能力である」ということです。

そして、その能力から生み出されるものが、製品です。

次をお願いします。

これは、小さな黒板ですけれども、ここに書かれておりますのは、先ほど申し上げました「芸術=資本」です。これは、いかなる労働のフォームも芸術であるということ。つまり、一つのあそこにも書いてありますけれども、人々の能力、人々の創造力というものが、まず企業に流れ込み、そこでオーガナイズされて、そしてそれが新たに形のある製品として生み出される、これがあの循環の内容でありますし、それがこの黒板に書いてあることの内容なんです。どの労働形態であろうともそれは芸術であるということ。です。

ここから非常に重要な問いが出てまいります。私がここで書きました図式というもの、これは極めて一般的なものですが、一般的であるがゆえに、あるいは、にもかかわらず、これは完全にすべてを含んだものであります。

では一体、この中で貨幣、お金というのはどういう位置を占めるのでしょうか。

このような経済の循環図の中には貨幣、お金というものは少しも姿を見せません。

そこで問題となるのは、貨幣とは一体何なんだろうかということ。です。

資本主義においては、貨幣というのが最高の経済的な価値であるというように言われます。

しかしながら、私たちのこのような経済価値の循環におきましては、貨幣というのは少しも姿を現しません。

貨幣はこの中で姿を現しようがないのです。なぜかと申しますと、貨幣というのは本来、経済的な価値ではないからです。

貨幣は本来経済価値ではない、そうではなくて何なのか——これは大きな発見なのですが——経済価値についての権利を調整するものでしかないということを、私たちが思考を通して認識することが今日重要なのです。

つまり、私たちはまず私たちの思考、意識の中で、貨幣を経済的なものから、法の、民主的な権利の領域に分けなければいけません。そういうことです。重要なのは、経済価値を貨幣によって測ってしまう伝統的な、古い伝統的な考えがまだそこに残っていることを認識することです。以前に金がそうであったようにです。金は貨幣であり、またもちろん資本でした。金は価値の基準だったわけです。しかしながら、こうした関係性は実際、現代の世界経済の発展を通してとうに解消されてしまいました。つまり、貨幣は意味の変化を成し遂げたのです。貨幣はもはや経済価値ではなく、権利の調整器、経済価値を制御するための調整原理です。それは今日把握されなければならないことで、またそこから論理的な帰結がもたらされなければならないものです。貨幣が長い間経済価値と受け取られているのは、資本主義のあり方と関係があり、そこでは貨幣は最上の価値以外のものではあり得ないとされています。しかしながら、これは私たちの伝統からいまだにどこかにある間違った概念、原理です。私たちはまずそこから、私たち自身の思考の中で内的に自分自身を解放する必要があるのです。

私たちは先ほどの図式というものを、ここでちょっとひっくり返して考えてみようではありませんか。これは先ほどの図式を 90 度回しまして、立ててみます。そうしますと、一番最後の円の部分がいわば基礎、床の部分を成します。そしてこの部分に先ほどの経済が来るわけです。真ん中の部分、ここに民主主義が来ます。一番上に自我というものが来ます。そして、この一番下の部分で先ほどのあの図が現れてくるわけです。すなわち片方が生産であり、片方が消費というその流れ、それが一番底辺で行われていくわけです。

極めて図式的になるかもしれませんが、この真ん中の部分、これは先ほども申しましたように、民主主義に関わる部分、権利ないしは法に関わる部分です。私たちがここでしなけ

ればならないことは何かと申しますと、もともとこの貨幣というものが経済という一番下の部分に属するのではなくて、これが実は法の部分、権利の部分に関わっているものだというのをきちんと認めることです。

先ほどの権利、法の調整機能としてのお金ですけれども、あちらの方ではどういうふうになるかというのをまず見ていきたいと思います。皆さん方に2つ目の循環システムというものを意識してもらいたいと思います。ちょうど今書いております図の上に載せたかじで考えてください。左側のポイントのところには企業があるわけですが、その企業は人々の能力、創造力を使わなければいけないわけですが、ここに能力、創造力が流れてくるためには、企業には信用が必要になってきます。

この流れ、能力、創造力が流れ込んでくる流れというのは、反対にお金が企業に流れ込んでいくその流れに相当します。下からの反対の流れですけれども。

例えばですね、先ほどの右側の市場のところですが、市場のところでは500個のタイヤが必要になったとします。その場合にはですね、その500本のタイヤを作る企業は、自分のところに信用があるということを証明できるわけですね。そのために500人、600人、どれくらいの人が必要になるか分かりませんが、その信用が証明できるということになります。

要するに信用があるということ、信用が生じたということは同時に、義務も生じます。流れ込んできた人々の創造力を使って、新しい500本のタイヤを作るという義務ですけれども、反対に同時にその義務が生じて、その創造力を使った場合には、信用を一定期間のうちに、また返却するという義務も生じてきます。

ですから、ここではお金というのは信用、クレジットですね。

これは、動脈を流れる血液というふうに考えてもらってもいいです。

ですから、生産拠点にですね、栄養分を流し込んでいくという感じですね。

例えば、企業の中ではお金というのは、少し性質を変えてまいります。例えば、例に挙げたいのが、従業員の収入、所得ですね。

そのほかは、ありません。

これはちょっと誤解されやすいところだと思うんですが、企業が例えば一つのものを作るために、その製品を作るための素材が必要になるというふうに考えられます。そのためにお金が必要なんじゃないかと考えられる方もいらっしゃると思います。これは非常に一般的な考え方ですけれども、ただし、その時に別に分けて考えていただきたいのは、その素材を作る企業というのはまた別にあるということです。ですから、2つの企業というのは別々のものですから、先ほどの創造力の流れとか、お金の流れとかは独立して、一つ一つのところで所得になるということです。

この信用ということ、この信用というものから所得が生じてくるわけなんですけれども、その信用の大きさというのは結局2つの要素によって決まってまいります。まず1つはどれぐらいの従業員がいるかということが信用の1つになります。もう1つはそこで働く人たちの所得、結局、能力に対して支払われる所得の質、高さ、これが問題になります。これにはさまざまな形がありますがけれども、何らかの意味で民主的にこれが決定されていかななくてはなりません。すなわち、所得構造というもの、所得秩序というものが問題になります。例えば上限と下限とを決めておいて、その中で何らかの形を選ぶという、これも一つの方法です。しかし、これだけには限りません。ともかく民主的にこの所得構造というもの、収入構造というもの、こういったものが決められていくことが大事で、これを収入秩序というふうに呼んでおります。

大事なことはですね、この信用の全額、すなわち全企業を合わせた、全企業の持っている信用を集めたその総額というものが、この右側の総生産というものに見合っていることが必要です。

そして、このように所得、収入として入ってきましたお金というものは直ちに消費の領域に入ってまいります。誰もがこのように財布を持っているわけですね。

すなわち、お金といいますのは、この消費部門におきましては、どういう役割を果たすかと言いますと、一定の質を持った生産物を手に入れる権利の請求権ということになります。権利を保障するものです。

もちろんその過程で、消費過程におきましてもちろん、貯蓄という事態が起こったり、その貨幣が使われるということにタイムラグが起きることもあります。しかし、いつの日にかは必ず生産物を買取るという形で循環へと入っていくわけです。

そうしますと、貨幣というのはいったい何でしょうか？ 今のような形でもって、貨幣というの、その法的な、ないしは権利的な役割というものを成し遂げるわけです。

それでおしまいです。

あと必要なのはですね、そこで入ってきました貨幣、お金というものはですね、その信用、これはまだ実現されておられませんので、信用をカバーするためにあの中にまた戻っていくという、その道筋だけです。それ以外の何ものもありません。

結局、お金というのは、ここ〔図の右側の小さい円〕の場所で見ますと、何らの経済価値を持ちません。結局、静脈の血のようなものです。何らかの栄養分をもたらすものではありません。

あそこに、例えば心臓があると考えていただくと分かりますけれども、静脈を通じて戻ってきたお金というものは、あそこで新しく浄化されていく、次の段階へと送り出されていく必要があるわけです。

これが民主的なクレジット銀行というものです。

これがいわば社会の心臓にあたります。

あその真ん中にハート、心臓があるわけですね。

そして、それは当然ながら精神というものによって、上から規定されていかなければなりません。

こういうふうを考えてみますと、これが大まかなお金の循環という図式です。これを見れば分かりますように、いわゆるもうけ、利潤というものはここでは発生しようがありません。結局、お金というものは決して利潤を生むものではないのです。そして、もちろん考えてみますと、左の端の方でさまざまな企業の違いというものがあります。というのは、企業によって非常に多くのクレジットを必要とし、それによってお金が流れ込んできて、その信用というものがまたカバーされる必要があるものがあります。企業によりましては、あまりクレジットを必要としないものもあります。そういったものをですね、アソシエーション・バンクという形でもって、ここで調整していこうというわけなんです。結局、クレジットの過剰な企業、あるいは過小な企業というものが、間のバランスをとっていくわけです。そのクレジット過剰な企業、エンタープライズですね、これには学校が入ります。学校というのは非常に多くの信用、クレジットを必要とします。しかしながら、今度は自動車の生産のようなどころでは、クレジットはさほど必要ありません。この間の

落差というものを埋めていく、そして全体としてバランスを取っていくのが、このアソシエーション・バンクの役割であります。結局、このクレジットというものは、何らかの形で支払われる義務があるわけです。

ここで私は一応、この循環の記述を一通り終わりたいと思います。だいたいの大事なことは、これですべて入っていると思います。それからですね、これは実際には先ほどの蜂蜜ポンプ、これはドクメンタで行われました蜂蜜ポンプの中で、作業場で行われたその対話のだいたいの内容は、こういう問題を巡って行われたということを申し上げておきたいと思います。

もちろん彼らには 100 日間の時間があつたわけです。私たちはここで半日間しか時間がありません。

それでも構いません。

短くても構いませんと申し上げたのは、次のような意味です。だいたいの大枠のところがお分かりいただければ、そこから皆さんでさらに考えを深めていただきたい。そしていつの日にかですね、この根本的なことを出発点にいたしまして、未来のどこかの時点で対話を行いたい、そのための出発点ができればいいんだと。そしてまた、このことはボイスの、サークルで囲みましたあの部分、彫刻という部分にですね、深く関わっているということ、その点を申し上げておきたいのです。

そして、未来におきましては、企業というものは、このような話をどうしてもしなければならなくなるであろうと。このような対話というものが必要になってきます。そして、この対話というものは当然、それなりの対価を受けるべきものであります。

ちょうど私たちは今日ここで半日、話をしておりますように、あらゆる企業におきまして、週 1 回、午後に全従業員が集まって、このような話を、討論をするべきなんです。せざるを得ないんだと思います。

で、結局このようなことは民主的に進められていかなければならないわけです。結局、私たちのこの図に従って申しますと、この経済に関する法律というものが作られていかなければいけません。例えば収入に関する法律、クレジットに関する法律、そしてまたエコロジーに関する芸術、こういったものを私たちが請求し、作っていく必要があるわけです。これがまさに民主的な課題ではないかと思います。しかしながら、このような民主的な課題を担うような政党というものは、どこにもありません。これは事実です。ですから、私

たちがやりましたように、直接民主主義、国民投票による直接民主主義というもの、こういったものをどうやって設立して、機能させていくか、これが私たちの課題になってきます。

これはまた、このような仕事そのものが、一種の失業に対するプログラムということもできます。差し当たりの職がなくなったところで、路上に放り出される必要はないわけです。このような問題を巡って討論に参加するということ、それ自身が芸術です。彫刻です。拡大された芸術概念なのです。当然ながらこれは一つの仕事であります。ですから、それに対して当然対価を受けて当たり前なのです。

このような言い方をしますと、なんてナイーブな言い方をしているんだと思われるかもしれませんが。あるいはそういうふう聞こえるかもしれませんが。それは私も分かっております。これは一種の自分で作っていくべき音楽なのであります。そしてこれでもって人との間の対話というものが初めてできるんです。その意味でこれから未来に向けて、これを行っていくよりしょうがないことなのであります。

今から少し何枚かスライドをお見せします。

今からお見せするのは『ドクメンタ7』、『ドクメンタ6』の] 5年後のことです。

このドクメンタでボイスは 7000 本のオークの木を植樹しました。

このプロジェクトでボイスがやろうとしたのは、小さなエコロジーのプロジェクトということもできますけども、その1本1本のオークの木の根元のところに玄武岩の柱体が置かれるということが計画されておりました。

今、後ろに見えますのが 6999 本の玄武岩の柱です。今お見せしているオークの木ですが、これは最初の1本目、そして横に立っているのが1つ目の玄武岩ということになります。

ここにはオークの木だけが見えています。その後ろにあるのは美術館、フリーデリシアヌムです。つまり、ボイスは美術館から外に出て、今や社会の中に入って行って芸術的な仕事を行ったわけですが、それは本来、将来においてまさにクレジットを与えられなければならないエコロジー的な仕事のモデル、原型となる仕事を見せたのです。

これは、先ほどお見せしました苗木を上から見たところです。ここに最初のオークの木と最初の玄武岩の柱体があります。そしてその後ろには、大きなバッテリーが横たわっています。まだ植えられていないオークの木、つまり、玄武岩の柱がまるで巨大なエネルギー、エネルギーのかたまりのようにそこに横たわっていて、それは、まだ実際には植えられていない未来のオークの木を代理しているわけです。

このひとつの大きな彫刻と見ることができるものに比べて、こちらの最初のものはまだ何と小さいことでしょうか。

次のスライドを。ここでは、彫刻はすでに小さくなってきております。要するにこの玄武岩の柱はここから消えて町の中のどこかに立てられる。つまり、玄武岩の彫刻は、徐々に小さくなっていく、撤去されていく彫刻だということです。

次のスライドを。すでに玄武岩の柱はとても小さくなっています。要するに時計の針を見るように、この大きさを見ることで、もう一方の彫刻がどのくらい進んでいるかということを読み取れる彫刻になっています。

この 7000 本のオークの彫刻は次のドクメンタ、すなわち 1987 年の『ドクメンタ 8』で終了しました。最後のオークが植えられたわけですが、ヨーゼフ・ボイスは 1986 年の 1 月の亡くなってしまいました。つまり、この仕事、この彫刻はボイスの死を超えて続いていたのです。ボイスはこの彫刻の中で自らも死んでしまいました。

次のスライドを。ここでもう一度目にしますが——スライドの表裏が反対になっていますね。どっちでも同じです、構いません——上の方に、芸術＝資本とあります。鏡のように反対になっています。これは、ホワイトボードの左に書いた図と同じです。〔マンモスを描いて〕マンモスはこの方向〔図の右の方〕を見ています。

次のスライドを。これは 7000 本のオークと並行して作られた最後の時期の作品なんですけれども、これも玄武岩の柱です。それぞれの柱から一部が切り出されて手を加えられ、そしてまた元に戻されています。

この彫刻は『20 世紀の終焉』と名付けられています。

これらの岩石が、意識器官を手に入れ、生命を持ったかのような感じがします。

つまり、この作品は石を使った困難なもので、今もなお成し遂げていかなければならないものですが、私たちはそれをやらなければならぬし、造り出してもいかなければなりません。

ここの上のところに黒い月が見えます。

これは実際は、ボイスがデュッセルドルフ美術館の壁に開けた穴です。

つまり、この境界、このうがたれた穴を通して、芸術は、美術館ではない場所に、さらに外に出ていくわけです。

遠くからですと、この穴は壁からぶら下がっている黒い円板のように見えます。

黒い円形です。

次のスライドを。もう一回先ほど見ました切り出された環状の石ですが、正確にはめ込まれています。植木鉢のようにも見えます。

次のスライドを。これは先ほどの黒い穴です。この壁を通る穴、その反対側にはUの字の片側半分のような形に高く曲げられた小さな煙突が付けられていて、そのために光は中に入ってきません。

この黒い穴は、ボイスが1981年、デュッセルドルフで開かれた「黒」というタイトルの展覧会のために作ったものです。

これは、煙突までの煙道パイプです。

この作品は、展覧会全体の中でもっとも黒いものでした。

そして、この展覧会にはもう一つの絵がありました。

それはカジミール・マレーヴィチの『白地に黒い正方形』です。これが出てきたのも3度目なので、ご存じだと思います。

しかしながらマレーヴィチは、『黒い正方形』だけを描いたわけではありません。次のスライドを。

『黒い円』1920年。

一つの絵、一つの円、一つの穴です。

次のスライドを。これが、私が皆さんにお見せしたい最後のスライドになります。すなわち、つい今しがた穴が開けられたばかり、煙道パイプが設置されたばかりのときに、ボイスはこの穴から外をのぞいています。

そして今や私たちも、ますますいっそうこの黒い穴を通して見なければなりません。その黒い穴はつまり、私たち自身の瞳孔です。

つまり、これはここからそちらを、あの矢印の方向をですね、示している瞳孔なのです。あらゆるところで、あのような黒い穴を通して私たちは先を、未来を見ていかなければいけないのです。

どうもありがとうございました。

今から少し休憩しますが、その後おそらく30分ぐらい、短いのは残念ですが、話し合う時間があると思います。そこで、次では私がひとりで話すのではなくて、みんなで話していき、もっとたくさん皆さんが話すことで、一度私はこのことについての全体の意思を探っていけるといいかと思います。